

竹内愛二の社会事業における科学性

—「ケース・ワークの理論と実際」を通して—

石塚 翔平

第1章 本研究の背景と目的

三島亜紀子は「医師が専門家のモデルとされると、絶えざる実験・研究によって学問は進歩するといった思考が社会福祉領域においても再現され、実践の理論化や、『科学』化がソーシャルワーカーの専門性を根拠づけると考えられるようになった。」(三島 2007 : ii)として、社会福祉の理論化・科学化がソーシャルワーカーの専門性の内容を裏付けるとしている。しかし、現状としては「しかしながら、しばしば社会福祉学という学問の『研究蓄積の弱さ』が指摘されるのも事実である。『社会福祉学など学問ではない』『社会福祉学など科学的ではない』と。同時に、社会福祉学という学問が支えられるとされるソーシャルワーカーの専門性も低いと評価されることが多い。」と指摘する(三島 2007 : i)。

私自身、福祉現場の方や一部大学の先生などからは、「大学の講義は現場に出たら役に立たない」、「福祉は本を読むよりもボランティアをして感じるのが大切だ」、「社会福祉学は他学問の寄せ集めだ」などと言われたことがある。

こういった現状や経験を踏まえ、社会福祉における科学性とは何なのかと考えるようになり、日本における科学的社会事業の開拓者である竹内愛二の科学性を振り返りたいと考えた。

本研究の目的は、竹内愛二の社会事業における科学性を振り返り、現代におけるソーシャルワーカーの専門性向上に寄与したいというものである。

第2章 本研究の方法と分析の枠組み

本研究は、戦前・戦後と 1938 年・1949 年・1952 年の三度に渡り、同様のタイトルで出版された『ケース・ワークと理論の実際』1)から、竹内愛二の社会事業における科学性について考察をする。

そこで本研究の方法と分析の枠組みとして、4 点を挙げることができる。

第 1 に、科学という言葉の意味である。一般的に科学の意味は、社会学辞典 2)では、「通常は『自然科学』を指す。自然についての特権的な知識体系。語源はラテン語の *scientia* で『知識』全般を言う語だった。」(見田ほか 1994 : 127)としている(見田ほか 1994 : 127)。

竹内における科学は、三島がアブラハム・フレックスナー 3)の諸説から社会福祉は、「フレックスナーの掲示した望ましい専門家とは、基礎科学や体系的や学問理論をバックボーンとして『科学』的な実践をおこない、また実践で得られた知見をもとにして、知識や理論を恒常的に発展させていく者であった。この志向が社会福祉学

領域に流入し、社会福祉実践の『科学』性を保持するために、諸学問の理論が自らの学問の基礎とされ、実践へ応用することが重要とされるようになった。」(三島 2007 : 29-30)とし、社会福祉は諸学問を理論的基盤に位置づけるようになったとしている。このことは竹内にも該当する 4) として、「木田哲郎は、基礎科学に『理論的基盤を求めている点が戦後の特徴』(木田[1967 : 70])であると指摘したが、社会福祉学が『科学』を志向した時点からこうした傾向はみられた。戦前、竹内愛二はすでに次のように述べている。諸科学の提供する智識乃技術は凡て之れケース・ワーク遂行の必須要件をなすものなのである。特に生物學、醫學、經濟學、教育學、法律學、社會學、心理學、精神衛生學等は最も重要性を有するものである(竹内[1936 : 33])。竹内のこの姿勢は、戦後も継続された。彼は、『ケース・ワークの理論と実際』において、『生物学、医学』『心理学、精神衛生学』『教材』『社会』『宗教・道徳』の『五つの立場』から、多角的に問題を考察しなければならないと説いている。(竹内[1949 : 24])」5) (三島 2007 : 30)とし、竹内は戦前、戦後に上記に挙げた基礎科学を社会事業の理論的基盤として位置づけている。

よって、本研究における科学とは、諸科学の知識をケースワーク遂行に援用するという意味にする。

第2に、竹内の社会事業における概念である。竹内は『ケース・ワークの理論と実際—内外事例による研究—』(第三版)6)において社会事業を『個別・集団・組織社会事業とは(個人・集団・地域社会)が有する社会的要求を、他の種々なる要求との関連において自ら発見し、これを充足するための能力、方法、社会的施設等の資源を開発・利用するのを、専門の(個別・集団・組織)社会事業が側面から援助する過程をいう』としている(竹内 1952 : 26)。この概念を採用した理由は、まず『ケース・ワークの理論と実際』というタイトルの著書が、改訂版として第三版まで出版されている。その同一名の著書において最後に提示された概念が上記のものであり、これは竹内の研究における一つの到達点と考えられるため、本概念を採用することにした7)。

第3に、竹内の研究に対する姿勢について一番ヶ瀬康子は、社会福祉理論の歴史的課題として戦前・戦中の『連続』と『非連続』を挙げ、当時の研究者を三類型に分けており、竹内を「…第二類型は、戦争責任その他とは関係なく、戦前、戦中もほぼ同じ論調で論稿を書いてきた人々であろう。」(一番ヶ瀬 2000 : 3-4)と分類している8)。

吉田久一は、竹内の思想や研究的営為が表れているとして「(1)『ケース・ワークの理論と実際』(1938.5)、(2)『厚生事業に於ける個別生活指導法』(『厚生学年報』1942.7)、(3)『科学的社会事業入門』(1955年)」(同志社 2004 : 120-121)の三点を挙げ、それぞれ考察している。吉田は(1)について「…本書は従来の啓蒙的直訳的紹介に対して、日本では最初のまとまった著述である。竹内はここで、社会事業を要せざる時代招来の努力と、科学的社会事業の超時代性を論じている。そしてケースワークの対象とする人間個性は、従来の『人格主義』や『人格完成主義』ではなく、『新人格主義』ないし『社会的人格主義』としている。ここでのラジカルな発想は、当時社会事業でさかんであった社会主義思想や、中島重から影響を受け

ていると思われるが、竹内ケースワークは時代社会を超えて存在するという確信であろう。」としている(同志社 2004: 121)。(2)は『個別生活指導法(ケースワーク)』9)という概念について「本定義にも竹内ケースワークの『超歴史性』が見える。しかしここにみえる全体主義的な『奉仕者』としての『人格』と、近代的『人格』の関係についてあまり説明がないが、クリスチャンとしての竹内は『人格』、並びにケースワークの『科学性』にここでも離れてはいない。」としている(同志社 2004: 121-122)。(3)では、竹内の社会事業における概念が整序されている著書は『グループ・ウォークの技術』であるとし、『社会福祉事業と社会事業』という論文において「『社会事業』と『社会福祉事業』を区別し、『社会事業』を『特定の科学の応用科学的専門職業』としている。」という(同志社 2004: 122)。そして、「竹内方法論の社会的基盤は『超歴史的』に幾変転があったが、『科学的社會事業』と、クリスチャンとしての『人格概念』は、姿を変えながら連続している。」(同志社 2004: 122)とし、『科学的社會事業』と『人格概念』は竹内ケースワークにおいて連続していると指摘している。

よって、本考察では、戦前・戦後と取り組まれ続けた竹内の社会事業における科学性がどのように志向され、社会事業における基礎科学の位置づけ、社会事業の理論基盤が体系立てられていく過程を考察していくとする。なお、今回は科学性について追究するため、吉田が指摘する人格概念は別の機会に譲るとする。

第4に、本研究を行うために用いる一等資料の『ケース・ウォークと理論の実際』に関することである。これは第一版が1938(昭和13)年5月28日(以下、第一版という)、第二版が1949(昭和24)年8月20日(以下、第二版という)、第三版が1952(昭和27)年11月15日(以下、第三版という)の三度に渡り、同様のタイトルとして改訂版が出版されている。よって戦前・戦後における竹内の社会事業の科学性を考察するには適していると言える。しかし、この第二版と第三版の相違点に関しては、竹内いわく「前版と本版との相違点は、その原理や、技術そのものにあるのではなく、前版で取り上げられた事柄を、新しい資料や、表現によって、できるだけ明確化しようとした処である。特に今回は筆者自らが多少とも関係した三つの事例を織り込み、又アメリカの事例等をも紹介して、ケース・ウォークの理論と、実際との理解に資せしめようとした点は、筆者自らが聊か自負している処である。」(竹内 1952: 5)としていることから、第二版と第三版では竹内のケースワークに対する基本的姿勢は変わらないと考えられる。しかしながら、第二版と第三版では目次の構成が異なっていたり、武田建が別物として論じていることから10)、正確に第二版と第三版において基本的姿勢が変わっていないとは言えない。したがって第二版と第三版が、同様の内容として解釈することが出来るが、厳密に同様と解釈することも困難である。そのため本研究では、ひとまず竹内が同様と主張していることから、第一版から第二版、第三版と展開されている科学性を、第一版から第二版と第三版がほぼ同様の内容であると仮定して、時系列的に考察をしていくとする。

よって、本研究は第一版を出発に、第二版と第三版がほぼ同様の内容であると仮定して、それを終着に、竹内の社会事業における科学性を時系列的に考察していくとする。

以上のことから本研究は、以下の方法と分析の枠組みを用いて行う。

- ①本研究における科学は、諸科学の知識をケースワーク遂行に援用するという意味にする。
- ②竹内の社会事業における概念は、第三版の概念を採用する。
- ③戦前・戦後と取り組まれ続けた竹内の社会事業における科学性がどのように志向され、社会事業における基礎科学の位置づけ、社会事業の理論基盤が体系立てられていく過程を考察していくとする。なお、今回は科学性について追究するため、吉田が指摘する人格概念は議論の俎上に上げないとする。
- ④『ケース・ワークと理論の実際』を用いて、その第一版を出発に、第二版と第三版がほぼ同様の内容であると仮定して、それを終着に、竹内の社会事業における科学性を時系列的に考察していくとする。

以上の方法と分析の枠組みから竹内愛二の社会事業における科学性を考察していくとする。

第3章 竹内愛二の社会事業における科学性

第1節 第一版で提示された竹内愛二のケースワークにおける科学性

武田が第一版を、「それ以前に幾つかの論文が発表されており、それが前述の著作の基礎となっている。……当時の先生の事例研究に関する接近方法をみると、我が国の社会福祉関係者のなかにある『力動心理学的ケースワーク』の旗頭という一般のイメージとは逆で、むしろ社会学にその基盤を求めている。」(武田 1980 : 85)と評している。そのように、竹内は『第二章 ケース・ワークの前提としての社会病理学』において、クーン・マン著『社会病理学』11)が『宗教的乃道德的態度』『生物学的乃医学的態度』『心理学的乃精神卫生学的態度』『経済学的態度』『社会学的態度』の各方面から個人または集団が陥る問題の理解には重要であるとしており、これら態度を「然し平衡のとれた専門的社会事業は、必ずや個人や團體の提示する要求に従って強調点を異にしうるが、兎も角も此等總ての態度を用ふるであろうと信ぜられる。」として総合的態度の必要性を述べている(竹内 1938 : 29)。特に社会学に対しては、「…何物にも増して強調すべきは、無論社会的方面であると云ふのは、他の方面を軽視するというのではなく、我々が此方面に特に興味を有し且つ此方面には我々は特に責任を感じずるからである。」(竹内 1938 : 29)として、ケースワークにおいては社会学を重要視しなければならないとしている。

竹内は第一版の『(一〇)科学乃経験の應用 (Science and Experience)』において、科学の応用は「ケース・ワークは其の取扱ふ種々なる問題の理解、及び此等の解決に要する、有効適切なる方法及過程を進歩發達せしむるため、ケース・ワーク自体が獲得したる経験以外に、他の専門的分野に於て用ひられて居る手段及び既成科学からの種々なる智識を得ようとする。」としている(竹内 1938 : 91-92)。

続けて『第二章 ケース・ワークの前提としての社会病理学』で検証した宗教、道德、生物学、医学、心理学、精神衛生学、経済学、社会学に加え、教育学、法律学等の科学に対して、「ケース・ワークの将来は、其れ自體の科学的進歩發達に負ふべきは云ふ迄もないことである。即ちケース・ワークの科学性は、一面ケー

ス・ウォーカーが、各種の問題に対し、科学的態度で對してゐるか否かということと、他面、茲に掲げたやうな、諸科学部門を如何に應用してゐるか、又應用しようとしてゐるか云ふことに依つて決定されるのである。吾々の知れる限りでは、未だケース・ウォークに應用せられた概念的、或は事実上の科学的資料は、纏められても、系統立てられてもゐないのである。現今一般に用ひられているケース・ウォークの用語、例へば収入、生活標準、遺伝、行為、動機、家計、栄養、知能等の如きものは、他からケース・ウォークに借用されたものであるが、借用された後、ケース・ウォーカーが特有なる技術的用ひ方をなした結果、今や殆どケース・ウォーク獨特の概念、又は少なく共、印象を有するに至つたものである。然し目下の處ではこれらの用語が有するやうになつた新意識を明確に述べることは困難である。此點においてもケース・ウォーカーの研究が大いに要請されてゐるのである。」(竹内 1938 : 92)とし、研究的余地があることを示唆している。

このように第一版では、ケースワークは社会学を重要視し、個人または集団の問題理解のために諸科学が必要だとしている。またケースワークの科学性はその他の科学を応用することであり、その応用方法、目的を系統立てて説明や、その他諸科学を使用する目的意識を述べることは非常に困難であり、ケースワークにおける研究課題であるとしている。

これに対して第三版では、『第三章 社会事業の科学的及び専門事業的性格について』において、社会事業が科学的であるという場合は、①常識的な意味と②真に学問的な意味の二つがあるとしており、①常識的な意味で科学性と②科学的だという学問的な根拠に分けて考察している。

第2節 第三版で揭示された竹内愛二の社会事業における科学性

①常識的な意味で科学性(常識的な意味)

これは「社会事業が科学的なものであるとか、そうでなければならぬと、我々がいう多くの場合、我々は色々な科学の協力・援助を得て、社会事業をなすものだとの意味に於てである。即ち社会事業をなす場合には、我々は常識や、信念や、勝手な想像などに頼つてしてはならない。」(竹内 1952 : 31-32)とする立場である。このような立場から考えた時に、「即ち我々は社会事業をなすのに、各種の科学の協力・貢献を歓迎するものではあるが、自らは、単なる『纏め役』的存在で満足するものではない。換言すれば、社会事業は真に学問的な意味で科学的になされるものである。即ち真に科学的な営みには、すべてその目的や、対象や方法、形態などが、各々他のものから、明瞭に区別されたものでなければならぬのである」(竹内 1952 : 33)とし、社会事業における独自の学問的根拠の必要性を訴えている。

②科学的だという学問的な根拠(真に学問的な意味)

これは「そしてそれは前述の如く社会事業家が、それ独特の目的、対象、方法、形態等を有する専門的なものでなければならぬという意味のものである。」(竹内 1952 : 33)という立場である。この立場から竹内は、「私は寧ろこの場合社会学を第一位に持つてきて、『文化人類学的な社会学』とし、更に社

会心理学的要素を、動的心理学(dynamic psychology or psychodynamics)なものとして加味したものと考え、かかる社会学を理論的に、社会事業を科学的に裏付ける独自のものとする立場をとるものである。即ち右のごとき社会学を、社会事業独自の基礎科学となし、他の諸々の科学(社会科学に限らず)を以て、協力的、あるいは補助的なもの(accessory science)と考える。」としている(竹内 1952 : 33-34)。

このような社会学の考え方は、「右のような社会学はアメリカには現存しないかもしれない。しかし社会学を以て、一言にして『人間関係の学問』であると広義に解すれば、それは我々が社会事業をなす場合の裏付けを最もよくしてくれると思う。」(竹内 1952 : 34)とし、このように社会学を人間関係の学問である立場を取る代表として、ピティリム・アレクサンドロヴィッチ・ソローキン 12)の社会学を挙げている。

そして、「右のように、三つの方面から、人間関係について研究するのが、社会学の任務であるとすれば、社会事業は社会学そのものの応用技術として、これ又当然右の三つの方面から、人間関係の問題を解決する任務をもつものだということができるであろう。」(竹内 1952 : 34-35)13)とし、社会学は人間関係について研究することが任務であり、社会事業は社会学の応用技術として、人間関係の問題を解決することが任務であると位置づけた。

また「それと同時に、社会事業が他の色々な科学の協力を必要とするものということにも、理論的根拠が与えられることになる。即ち人間関係及びそれらの問題は、社会学だけでなく、他のあらゆる科学の研究対象をなす現象と関係があるから、その解決には、直接・間接に、これら他の科学の認識が必要になるということが明瞭になって来るのである。」(竹内 1952 : 35)として、他の諸科学の応用理由を説明している。

このように第三版では、社会事業における独自の学問的根拠の必要性から、社会学を人間関係の学問とし、社会事業を社会学の応用技術として、人間関係の問題を解決することが、任務であると位置づけた。こうすることによって、他の諸科学の応用の必要性が明確になるとしている。

以上のように、第一版において竹内は「われわれの知れる限りでは、未だケース・ワークに応用せられた概念的、或は事実上の科学的資料は、纏められても、系統立てられてもいないのである。……しかし、目下の所ではこれらの用語が有するようになった新意識を明確に述べることは困難である。」(竹内 1938 : 92)とし、これをケースワークの研究課題としている。

この研究課題をひきつづき第三版では、社会事業における社会学と他の諸科学の関係性を、社会学＝社会事業独自の基礎科学、他の諸々の科学(社会科学に限らず)＝協力的、あるいは補助的なものと位置付けた。また社会学＝人間関係について研究するもの、社会事業＝社会学の応用技術として人間関係の問題を解決するものと規定し、他の諸科学との関連性を導き出して、他の諸科学の援用が必要となることを明確にすることで、第一版で挙げていたケースワークにおける研究課題を克服している。

よって、第一版と第三版にかけて竹内の科学的社会事業としての科学性は連続しており、自己の理論を発展、向上させたと言えるであろう。

第4章 終章

以上のように、竹内愛二の科学的社会事業における科学性を考察してきた。それは第一版では、ケースワークにおいて重要視しなければならないとした基礎科学である社会学を第三版では、『人間関係の学問』として捉えることにした。人間関係という社会の基本的な要因を研究する社会学を社会事業の理論的基盤とする供に、人間関係は社会の基本的な要因であることから、これが他の諸科学においても関連することであるため、社会事業が諸科学を応用する理論的根拠を導き出した。こうした学問的基盤を明確にした上で、社会事業を社会学の応用技術として人間関係の問題解決という位置づけにすることで、社会事業独自における特権的な知識体系として体系化したと言えるだろう。

また三島は、「社会福祉学における研究は、その創始から学際的研究であったといえる。」(三島 2007 : 32)とし、「社会福祉学の場合、近代的な研究における専門分化の弊害をみる前に「学際」の形式をとりはじめ、それが専門職化の手段とされた点で特異であったといえる。」(三島 2007 : 32)として、社会福祉学は学際的研究が行うことを、専門職化の手段にしたと指摘している(14)。三島も言っているように、竹内にも学際的研究要素があるように見受けられ、科学化を専門職化の手段としているように捉えられなくもない。ただ少なくとも、竹内の社会事業における科学性を考察する限り、その科学性が向上に伴い、概念などが発展していることから、竹内のような科学性の視座は、現代におけるソーシャルワーカーの専門性向上にとって必要不可欠だと思われる。

注釈

- 1) 竹内愛二(1938)『ケース・ワークの理論と実際』巖松堂書店
竹内愛二(1949)『ケース・ワークの理論と実際』巖松堂書店
竹内愛二(1952)『ケース・ワークの理論と実際—内外事例による研究—』巖松堂書店
- 2) 見田宗介・栗原彬・田中義久(1994)『社会学辞典』弘文堂
- 3) アブラハム・フレックスナー Flexner, A. 1866—1959 年, は、1915 年の第 42 回全国慈善矯正事業会議(National Conference of Charity and Correction)の講演において、専門職の成立要件は、「①(知は体系的で)学習されうる性質、②実践性、③自己組織化へ向かう傾向、④利他主義的であること、⑤責任を課された個人であること、⑥教育的手段を講じることによって伝達可能な技術があること」(三島 2007 : 1-2)という 6 つの属性を挙げており、ソーシャルワーカーは専門職ではないと結論付けた。また三島は「講演の記録があいまいなことから、『基礎となる科学的研究(基礎科学)のあること』が七つめの属性としてあげられたり、右の①

から⑥のいずれかの代わりに六つの属性の一つに数えられたりすることもある。」と補足している(三島 2007 : 2)。

- 4) 三島は竹内以外に、谷川貞夫、大塚達雄、嶋田啓一郎、福富昌城などの研究者が社会福祉の理論的基盤における諸学問を掲示したとしているが、『現在に至るまで社会福祉学の基礎科学となるべき学問は不確定である。』としている(三島 1997 : 21)。

- 5) 三島は、本引用文中に注釈として、『ケース・ワークの理論と実際』は「同書は改訂出版されたもの。一九三八年に出版された『ケース・ワークの理論と実際』には、宗教・道徳・生物学・医学・心理学・精神衛生学・経済学・社会学・教育学・法律学が列举されており(竹内[1938 : 92])、変化が見られた。」と補足している(三島 2007 : 69)。また『五つの立場』については、「この『五つの立場』を示す際、スチュワート・A・クウィーンとヘンドリック・マンの『社会病理学』(一九二五年)に大きな影響を受けたことを明らかにしている。」と補足している(三島 2007 : 69)。

- 6) 竹内愛二(1952)『ケース・ワークの理論と実際—内外事例による研究—』巖松堂書店

- 7) 第一版では、「ケース・ワークは科学的認識乃方法を以て個人又は家族の直面せる困難を解決し、彼等が社会人として獨立して生活し得るやうに、主観的乃客観的資源を用ふる事であると曰ふことができるであろう。」としている(竹内 1938 : 33-34)。

第二版では、「ケース・ワークとは主として『三つの D』に関連して、個々の人間が陥った社会関係の不調整を、各個別々の方法で再調整し、進んで彼の有する諸才能を發揮せしめて、その社会的人格の成長・完成をなさしめるために用いられる、科学的認識に即した、技術的方法及び過程をいう」としている(竹内 1949 : 21)。

第三版では、「個別社会事業は個人が有する「社会的要求」を、その他の種々なる要求との間において、自ら発見し、これを充足するための能力、方法及び施設などあらゆる資源を、自ら開発・利用するのを、専門の個別社会事業家が側面から援助する過程をいう。」としている(竹内 1952 : 51)。また社会事業を「個別・集団・組織社会事業とは(個人・集団・地域社会)が有する社会的要求を、他の種々なる要求(円満な対人間関係に関する要求)を連、他の種々なる要求との関において自ら発見し、これを充足するための能力、方法、社会的施設等の資源を開発・利用するのを、専門の(個別・集団・組織)社会事業が側面から援助する過程をいう」としている(竹内 1952 : 26)。

- 8) 一番ヶ瀬は戦前・戦中に活躍していた当時の研究者を三類型に分類している。他の二類型は、「第一の類型は、山内正などのように戦前、戦中に活躍しながら、戦後その活動が途絶えてしまった研究者である。」、「第三の類型としては、戦前、戦中とはまったく異なった論調を改めて提起した人々であろう。」とし、当時の研究者として山内正、生江孝之、竹内愛二、磯村英一などを挙げている。

- 9) 個別生活指導法(ケースワーク)とは、「個々人をして社会的環境に適応せしむる

ことに依って、其生活を全うせしめ、且つ国家目的完遂に於る職能奉仕者としての人格を向上発展せしむるために用いられ、科学的認識に即したる方法乃過程を謂う。」としている(同志社 2004 : 122)。

- 10) 武田建(1980)「竹内愛二先生をしのんで」『社会福祉学』21(1), 81-93.
- 11) Queen, Stuart, Alfred, and Mam, Deibert Martin, Social Pathology, chapter I, Approaches to an Understanding of Human Ills. 本著は、「…今でもケース・ワークに限らず、科学的社会事業を考察する場合に、基礎的なアプローチを示していると、一般に承認されている、…」としている(竹内 1949 : 24)。
- 12) 「ピティリム・アレクサンドロヴィッチ・ソローキ Sorokin, pitirim, Alexandrovich, 1889~1967, ロシア生まれの社会学者。社会・文化・パーソナリティを三位一体として捉え、農村・都市・社会移動・革命・戦争など多岐にわたって研究を展開した。」(見田ほか 1994 : 570)
- 13) この三つの方面というのは、ソローキンの著書から「その第一は経済、政治、宗教などという社会的現象の中に、共通に含まれている、人間関係について研究することであり、第二は比等の社会的現象相互間の関係について研究することであり、第三に社会現象と生物学的、地理学的、宇宙的諸現象との間の総合関係を研究することである。しかし何れの場合でも、人間関係の研究を、右の如き三つの方面から研究するというに過ぎないのである。」としている(竹内 1952 : 34)。
- 14) 学際的研究とは、1940 年代後半のアメリカで使用され出した言葉であり、「現代社会で起こる問題は複雑な様相を呈しているため、従来の専門分野ごとの研究では対応がむずかしいという現状認識から、学際的研究は生まれた。」(三島 2007 : 32)とされ、「それは専門分化した多数の学問領域の壁を越えて協力し、研究を進めるものであった。」というものである(三島 2007 : 32)。

参考文献・引用文献

- ・ 竹内愛二(1938)『ケース・ワークの理論と実際』巖松堂書店
- ・ 竹内愛二(1949)『ケース・ワークの理論と実際』巖松堂書店
- ・ 竹内愛二(1952)『ケース・ワークの理論と実際―内外事例による研究―』巖松堂書店
- ・ 竹内愛二(1955)『科学的社会事業入門―若き社会事業者のために―』黎明書房
- ・ 三島亜紀子(1997)『社会福祉の学問と専門職』大阪市立大学大学院修士論文
- ・ 三島亜紀子(2007)『社会福祉学の〈科学〉性―ソーシャルワーカーは専門職か?―』勁草書房
- ・ 見田宗介・栗原彬・田中義久(1994)『社会学辞典』弘文堂
- ・ 同志社大学社会福祉学会(2004)『社会福祉の先駆者たち』筒井書房
- ・ 一番ヶ瀬康子(2000)『戦後社会福祉基本文献集 第一期 解説・解題』日本図書センター
- ・ 吉田久一(1974)『社会事業理論の歴史』一粒社
- ・ 吉田久一(1995)『日本社会福祉理論史』勁草書房
- ・ 武田建(1980)「竹内愛二先生をしのんで」『社会福祉学』21(1), 81-93.